

平成15年度研究協力業務実施報告書

全国内水面漁業協同組合連合会

平成15年度研究協力業務実施報告書

研究協力業務は、独立行政法人水産総合研究センターが自然環境に配慮した水産業の振興を図るために湯の湖・湯川において行う試験研究を推進するために実施する事業である。本年度も、養殖研究所日光支所の指導のもと、関係各位の協力を得て下記業務を実施した。

1 調査業務

魚類資源動態調査

内水面冷水域における遊漁資源管理技術の開発に資する知見を得るため、湯の湖・湯川において釣魚者へのアンケート調査（湯の湖 753 枚・湯川 1,032 枚、計 1,785 枚の回答）を行い、放流及び天然魚類資源の動態や釣魚の実態の把握に努めた。その回収率は一昨年の 7%、昨年の 9% から今年度は 14%（湯の湖・舟 8.25%、湯の湖・岸 11.25%、湯川 21.52%）と向上した。

2 環境保全業務

（1）釣り場管理事業の実施により発生するゴミ類の不法投棄防止及び除去

釣魚者に対して、不用となった釣糸・釣針などの釣り具等の遺棄について、注意を喚起した。

シーズン終了後の 10 月 4 日には、湯川の釣り人による清掃奉仕「サンクス湯川・リパークリーン」を主催し、30 人の参加を得て、川岸や遊歩道沿いのゴミ、木の枝に絡まったルアー等放置釣具の除去を行った。

また、湯川においては釣り人の増加する土・日に、監視業務のかたわら、遊歩道や川辺に散乱するゴミや放置釣具等の清掃を行った。これにより、近年川辺のゴミが少なくなったとの評価を得ている。

（2）湿原立入禁止区域への進入防止の啓発

釣魚者に対して配布するパンフレットに「釣魚心得」の重要事項として、進入防止を記載するとともに、釣魚券発売所において掲示する等、啓発に努めた。

また、湯川エリア内に設置している表示板でも表した。

（3）水域環境の監視

湯の湖における釣魚者に対して、撒き餌・寄せ餌・生き餌の投棄の禁止を呼びかけ、水域環境に留意した。

(4) 水質調査

養殖研究所日光支所及び栃木県等が定期的に行っている湯の湖の水質調査に協力した。

(5) コカナダモの除去

湯の湖に繁茂するコカナダモが湖尻周辺で湖面を覆い、景観を阻害するばかりか、一部が腐敗し悪臭を放っているため除去作業を実施した。7月24日～25日の2日間にわたり養殖研究所、湯元レストハウス、自然公園財団ら延べ27名が参加して、約12トンを除去した。

3 危険防止対策

(1) 水難事故防止対策

日光警察署等の協力・指導のもとに、釣り場における水難事故には常に留意し、監視体制を強化した。

(2) 犯罪、違法行為防止対策

5月1日の解禁日には多数の釣り人が湯の湖・湯川の釣り場に来場するため、釣り人間のトラブルや車上荒らし、また立入禁止区域への進入等の発生が予想されたため、日光警察署に防犯パトロール等、特段の協力を要請した。その他、不測の事態の発生に備え、警備会社に周辺のパトロールを委託した。

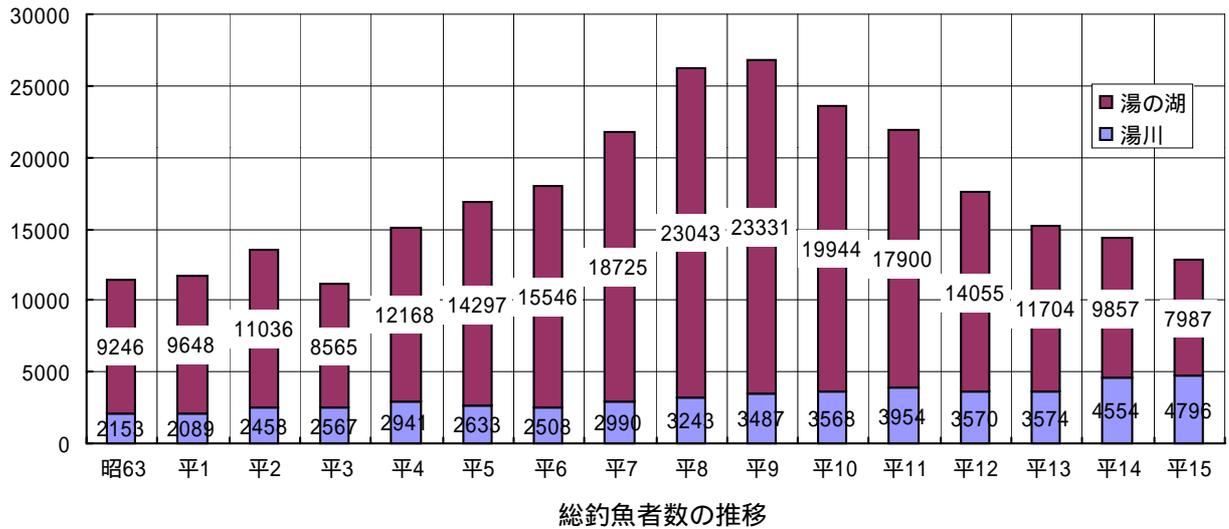
(3) 駐車違反對策

釣魚者の違法駐車防止対策として、カラーコーン(本会と日光警察署の連名入り)を要所に敷設するとともに、釣り場監視員が巡回し、注意勧告を行った。特に、解禁日の交通渋滞等に対応するため、解禁日前夜から当日にかけて、警察官の指導の基に、重点箇所に臨時交通整理員を配置した。

4 釣り場管理事業

(1) 総釣魚者数

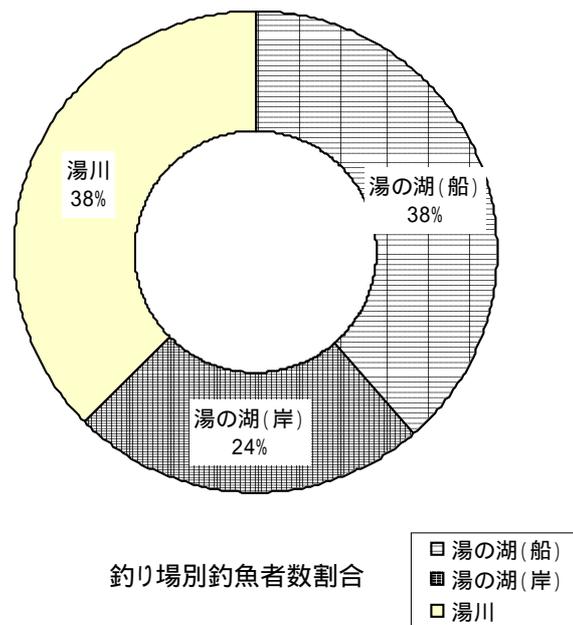
近年、内水面における遊漁者数は全国的に減少傾向を示しているが、当釣り場においてもその傾向にあり、平成9年度をピーク(26,818人)に、利用者は減少している。総数では、12,783人の利用となっており、前年(14,411人)と比較しても1,628人の減少(11%減)となった。



(2) 釣り場別釣魚者数

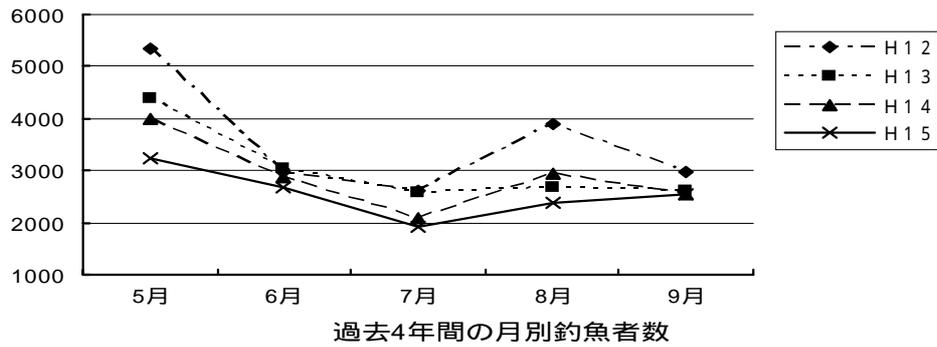
釣り場別では、湯の湖は7,987人で、総釣魚者数の62% (前年69%)を占めた。湯の湖は、舟釣りと岸釣りに区分されるが、舟釣りは4,919人(前年5,552人)で38%、岸釣りは3,068人(前年4,305人)で24%であった。

一方、湯川における利用者数は4,796人(前年4,554人)で、総釣魚者数の38%(前年32%)を占め、総釣魚者数が減少しているにもかかわらず増加した。



(3) 月別釣魚者数

各月の釣魚者数の変動を割合で比較すると、例年の傾向どおり、5月の利用者が最も多く、シーズン全体の25%(昨年28%)を占めた。続く6月は21%(昨年20%)、7月は15%(昨年14%)、8月は19%(昨年20%)と、例年とほぼ同じ動きで推移した。ただし、9月については、例年であれば8月の増加の後減少する傾向が強かったのが、今年度は僅かながら増加が見られ、全体の20%(昨年18%)を占めて終了した。今年度は湯の湖の釣魚者数が少なく、特に岸の釣魚者数が大幅に減少となった。

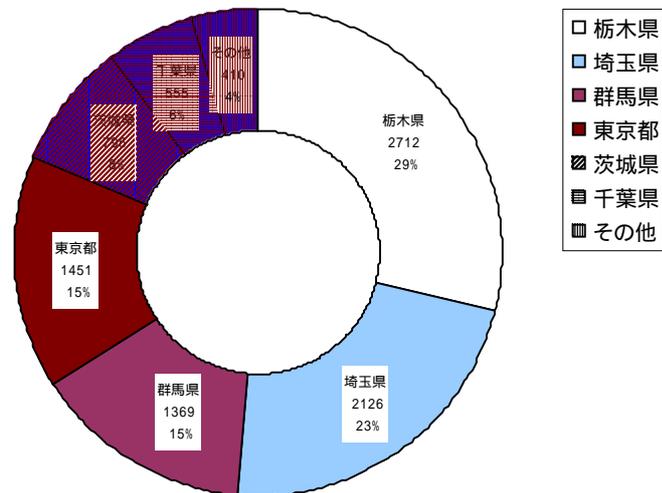


(4) 釣りカードによる釣魚者組成

本会では、釣魚者の実態を把握するため、毎年釣魚者に対し住所、氏名、釣り方等記載する簡単なアンケート形式の釣りカードの記入を要請し、その結果をとりまとめた。本年度は9,418枚(前年10,833枚)を回収した。

1) 都県別組成

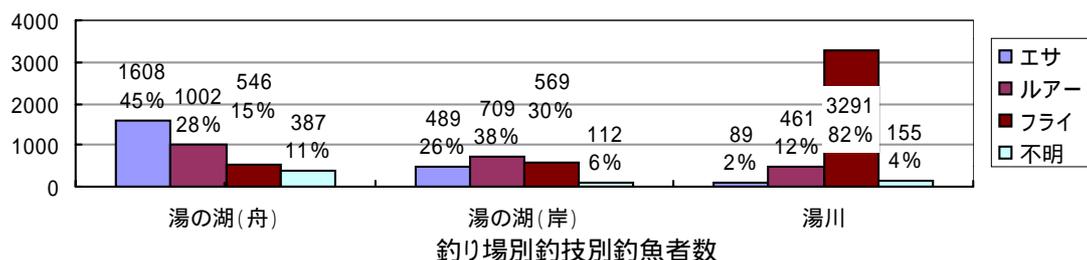
湯の湖・湯川を利用した釣魚者数の都県別組成は、栃木県29%(前年26%)、埼玉県23%(19%)、東京都15%(15%)、群馬県15%(13%)、茨城県8%(10%)、千葉県5%(11%)、その他4%(5%)の順であった。

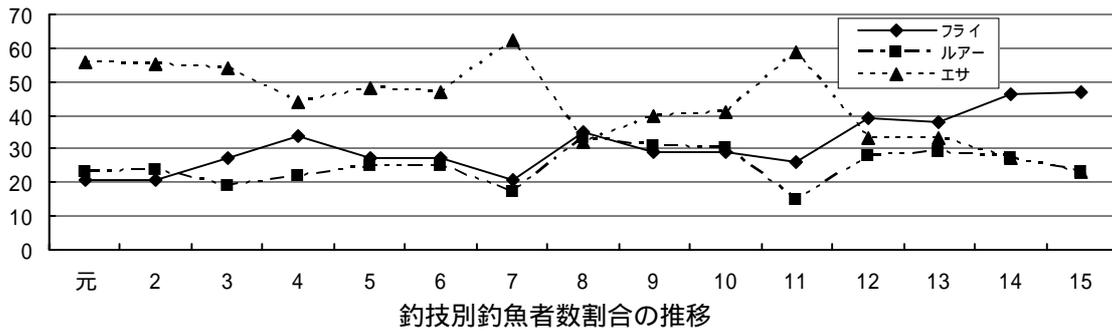


2) 釣り方別組成

湯の湖・湯川全体での釣り方別釣魚者組成は、フライ47%(前年46%)、ルアー23%(前年27%)、餌釣り23%(前年27%)、不明7%の順となった。かつては餌釣りが主体であったが、ここ数年はフライ・ルアーが主体となる傾向となっている。

この組成を釣り場別にみると、湯の湖における舟釣りでは、フライ釣り・ルアー釣り・餌釣りの比率がそれぞれ17:32:51であり、湯の湖の岸釣りでは、32:40:28である。一方、例年フライの割合が圧倒的に高い湯川においてはこの比率が86:12:2を示し、その傾向をさらに強めている。





(5) 成魚放流

湯の湖へはニジマスとカワマス、湯川へはカワマスを放流した。本年度の各釣場における成魚放流実績を表に示す。

湯の湖へニジマス4,858kg、カワマス933kg、湯川へカワマス164kgの合計5,955kgの放流を行った。

湯の湖への放流は、原則として週2回とし、状況に応じ多少増減させた。更に、放流当日の天候、休祝祭日等を考慮し、放流時刻、放流場所等、適宜変更して実施した。

湯川へは原則的に放流を行わないこととしていたが、解禁前の資源調査により魚影が薄いということで4月28日に100kgを、また、解禁当初に釣魚者から「魚が見えない」との声が多く、5月21日に64kg(一部タグ放流)を放流した。

	ニジマス		カワマス		計
	小型	大型	小型	大型	
湯の湖	3,460kg	1,398kg	780kg	153kg	5,791kg
	24,045尾	1,782尾	8,160尾	582尾	34,569尾
湯川	-	-	80kg	84kg	164kg
	-	-	776尾	387尾	1,163尾
計	3,460kg	1,398kg	860kg	237kg	5,955kg
	24,045尾	1,782尾	8,936尾	969尾	35,732尾

(6) 稚魚放流(湯の湖)

湯の湖における稚魚放流実績を表に示した。ヒメマス30,000尾、ホンマス20,000尾、カワマスを30,000尾放流した。

放流月	放流魚種	尾数
5月23日	ヒメマス	20,000
	ホンマス	20,000
6月20日	カワマス	30,000
10月1日	ヒメマス	10,000

(7) その他

1) 養殖研究所日光支所の行う啓発活動等への協力

養殖研究所日光支所が行う試験研究成果の公開・啓蒙のために行われる一般公開等には積極的に協力した。

2) 湯川倶楽部の活動

湯川の環境保全に関心を持っている人で、清掃活動やシンポジウムなどに参加する意思のある人をメンバーとする釣り人の会で結成 2 年目になる。本年度は、湯清掃奉仕「サンクス湯川・リバークリーン」のほかに、「澄んだ空気の中で自然繁殖が多くなった湯川でカワマスの産卵行動を観察しよう」と、11月8日に「カワマスウォッチング in 湯川」を実施し、湯川倶楽部会員の他、湯川を愛する釣り人など 25 名のご参加を得、カワマスのペアリング行動を観察した。

また、リバーウォッチング終了後はキャッチアンドリリースに係る講演と意見交換会(27名参加)を開催した。

3) ホームページの活用

全国内水面漁連のホームページに「奥日光トラウトフィッシング 湯の湖・湯川」の項を設け、解禁情報やイベント情報等の発信を続けているが、見ている人が能動的に情報を取り入れてくれるという利点があり、その効用は大きい。